

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No.10

平成5年3月1日発行

編集：総務委員 矢倉 睦

平成5年度総会報告

山岳会総会が下記のとおり開催されました。

- 日時：平成5年2月7日(日) 午後3時15分
場所：JR大阪保養所
議事：開会の挨拶・・・・・・・・大橋秀一郎会長
4年度活動報告・・・・・・・・幹事長及び各幹事
4年度会計報告・・・・・・・・会計幹事
会計監査報告・・・・・・・・高木会員
新役員選出
平成5年度活動計画・・・・・・・・企画運営幹事
ナムチャバルワ遠征講演・・・・・・・・重廣恒夫氏

新役員は以下のとおり選任・留任されました。

- | | |
|---------|---------------------|
| 幹事長 | 藤本 勇 |
| 総務幹事 | 奥田 寛、大島一恭、小松 稔、矢倉 睦 |
| 企画運営幹事 | 佐々木惣四郎、藤村達夫、西村正男 |
| 会計幹事 | 福山昇二、八木信男 |
| 山岳部指導幹事 | 廣瀬秀雄、小倉裕史、尾形達也 |
| 会計監査 | 高木健次、橋本信行 |

重廣恒夫氏の講演はスライドを中心に興味深いもので、テレビで得た感動を新たにしました。又この度、重廣氏を市大山岳会の会友に迎えることになりました。氏の今後のご活躍を、会員一同お祈りいたしております。

平成5年度 行事計画

企画運営幹事
佐々木・藤村・西村

- | | | |
|-------------|-------------------|-----------|
| ◇2月17日(水) | SKI&WHISKI 合宿 | (責任者:西村) |
| ~22日(月) | (柵池高原 リゾートホテル柵池) | |
| ◇3月 | 六甲山縦走 | (責任者:西村) |
| ◇4月29日~5月5日 | 立山の自然の旅 | (責任者:佐々木) |
| | 山岳部新入部員歓迎会(予定) | |
| ◇5月下旬 | 第102回大阪市立大学ボート祭参加 | |
| | (2クルー参加の予定) | (責任者:八木) |
| ◇6月 | 銅板会 穂高の旅 | (責任者:藤本) |
| ◇9月 | 比良山 お月見山行 | (責任者:佐々木) |
| ◇10月 | バードウォッチング(予定) | (責任者:鳥川) |

★会員の方の積極的なご参加をお願い致します。

★総会にはご参加できない方もお気軽にお越し下さい。

★ご要望やご意見がございましたら事務局または幹事までお願い致します。

■△◆○ 総会欠席者の一言 □▲◇●

《会員》

- ・卒業後65年になり気ははやっても身体が言うことを聞いてくれません。心身の訓練のためできるだけ日本生命顧問室へ通っております。 —西村信夫
- ・1)山歩きは無理ですが、山はやはり私にとり大切な存在で、山のスケッチは続けております。2)辱知の諸兄によろしく御伝声下さい —鳥雄淳一郎
- ・体調悪く、又寒期のため家庭にて療養中。 —藤野市三郎
- ・寒中お見舞い申し上げます。本年もどうぞよろしく。小生只今糖尿病療養のため医師の治療を受けています。昨年の運動療法に加え、食事について一寸厳しいです。今回は出席ご容赦下さい。 —富村恒次郎

- ・元気で毎日を楽しみ過ごしています。1939年3月の黒部川横断の山行を思い出しています。仙人谷の上部に信号灯（私鉄で使っていたもの）のあかりを唐松小屋で見つけた時の感激…今だに忘れられません。この記録（雪線16号だったと思いますが）を山岳会ニュースに再掲載していただけないか。 -白井順三
- ・御無沙汰しております。兜町通いをしていますが、不況で大変です。今月66才になりました。体調維持のため去年夏からスポーツクラブで週3回位汗を流しています。御出席の皆様には宜しくご伝声願います。 -谷口清士
- ・山岳会の皆様には引き続き御機嫌宜しくご活躍のことと大慶に存じます。私も昨年は少し休みましたが、回復いたしました。まことに残念ながら台湾の工場見に行くので不参となります。 -大倉豊彦
- ・いつも勝手しています。ちょっとした会社の山歩きとゴルフと家の用事で失礼します。 -林 日出雄
- ・去年1992. 6に転職しました。今のところ余り自由な時間がありません。 -堺 皓二
- ・毎回欠席で申し訳ありません。今年中には15回目のフルマラソンを走ろうと思いい、トレーニングを始めています。 -北濃祥二
- ・ナムチャバルワ遠征のお話お聞きしたかったのですが、風を引いてしまいました。 -東野美智代
- ・都合で帰阪できません。皆様方によろしくお伝え下さい。鹿島周辺には山も無く、風景にもなじめません。少々遠出をして、少しは山に親しむ様今年から心掛けるつもりです。 -中嶋信正
- ・今年も岸和田市の耐寒登山に参加せざるを得ず、欠席します。皆様に宜しく。 -山辻英也
- ・北海道に転勤して丸2年になります。山、スキー、ゴルフと仲間も出来て楽しくやっています。総会に出席できませんが、参加の皆様によろしくお伝え下さい。 -上田忠志
- ・2月4～8日シンガポールへ行きますので欠席させていただきます。 -廣瀬秀雄
- ・今年も担当クラブの試合と重なってしまいました。皆様によろしくお伝え下さい。 -八木信男
- ・山岳会のご発展をお祈りします。九州地方の山行なさいたい方は気軽に声かけて下さい。 -西沢裕子
- ・1992. 11. 22, 23 と富士山に行き、12. 31 にメキシコのネバダ・デ・トルーカ（4,700m）に行ってきました。 -山本 新

《会友》

- ・(ナムチャバルワ) 2年分のビデオを保存していますが実際に生の声を聞けなくて残念です。当日は父の法事で時間の調整ができませんでした。稲垣喜久雄・泉さん追悼集楽しく読ませていただきました。中でも泉さん自身の「ネパール行」は氏のお人柄そのままの語り口で書かれており、真に眼前でお話なさっているかの印象を受けました。編集に携わられました皆様に深く感謝致しますと共に泉さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。
—大堀亮義
- ・小生一昨年後半以来体調崩し、昨年早々一時入院を余儀無くされましたが、その後は自宅で殆ど寝たきりの療養生活を送っております。最近の貴会会員皆様のご活躍振りを拝見し大変心強く、今後とも益々のご活躍ご発展を祈りますと共に総会のご盛会をいのります。
—佐々木勇
- ・昨年9月より自宅開業し(家業を継承)、勤務先3日、自宅開業2日の兼業をやっております。
—澤井敏安
- ・古屋(フルヤ)(旧姓山本)に改姓しました。
—古屋 浩
- ・会員の皆様方が社会で活躍され、且つ山に登られる様子を会報は知らせてくださり、深く敬服しております。
—宗貫慶子



「泉隆次郎さんを偲ぶ会」報告

総務幹事 奥田 寛

- 日 時： 平成4年12月6日(日) 午後2時～4時
場 所： 大阪国際交流センター 「さくら西の間」
参加者： 会員48名、会友8名、近畿山岳愛好会16名、大阪腎臓バンク2名、
JACその他12名、御遺族7名 計93名
内 容： 川勝氏(昭32卒)の司会進行により次の通り進められました。
1) 黙禱 2) 会長挨拶 3) 思い出話・・汐見氏(同期生)

- ～本山氏（近畿山岳愛好会）～住吉氏（大阪大学山岳会）
4）献杯（副会長発声）5）歓談 6）ビデオ放映（故人のありし姿、足跡の紹介）7）思い出話 浅野氏（大阪府岳連）～三上氏（JAC）
～坂本氏（長男一郎氏の友人）8）泉家への追悼集の贈呈
9）泉家より挨拶（次男竹村二郎氏）
10）「雪山讃歌」合唱 11）中ノ挨拶（幹事長）

『IZUMI LOUNGE－泉隆次郎追悼集』発行について

追悼集会計担当 奥田 寛
福山昇二

会員各位からの募金ご協力を得まして、「偲ぶ会」の当日、追悼集を発行・配付することができました。そして、12月19日には、会員はじめ関係各位に発送手配しまして、20部ほどを残すのみとなりました。各位のご協力に対しまして、あつく御礼申し上げます。

尚、山岳会総会におきまして、追悼集関係の特別会計報告を行い、承認頂きました。詳細は省略させていただきます。

神古先輩からの寄付について

現役指導幹事 廣瀬秀雄

平成4年度、大阪市へ神古仁作先輩（昭5高商）より、現役の活動費用として50万円の寄付を頂きました。昨年より、学生部を通じて折衝を重ねてきましたが、この度、テント、登攀具、トランシーバー等の物品の支給がありました。現役一同大変喜び、感謝しております事を紙面をお借りしてご報告申し上げますと共に、改めてお礼申し上げます。

山行記録

冬の小黒部谷

和田城志

魚津岳友会の佐伯邦夫さんから、「こんな黒部の谷の中へどうアプローチするのか。これはほとんどビョーキ（重患）の人が考えることだ。」という賛辞をいただいた。

私は今回で後立山側の全ての尾根を下って、立山、劔岳のほぼ全ての主要な稜線をトレースした。都合12回の雪黒部横断をしたことになる。今、誰も見向きもしなかった小黒部谷からの劔岳北方稜線に興味を持っている。今冬のコースは次のとおりである。

白馬岳へは大池、小蓮華岳経由で登り、名劔尾根を下降、樺平に出る。ここより北仙人尾根を少し登り、小黒部谷の下部ゴルジュを高巻きして入谷、谷筋をトラバースして赤ハゲに突き上げている北尾根（赤ハゲ尾根と仮称）を直上、赤ハゲで北方稜線に出る。以後、大窓、小窓と辿り劔岳登頂、早月尾根を下山。

メンバーは、山本宗彦（明治大学OB、3国合同登山の時のチョモランマサミッター 32才）、中島正徳（立命館大学OB 27才）、宮坂仁（三重大学5回生 23才）と私（43才）である。

12月25日から1月3日の10日間で完登した。こんな完璧山行も珍しい。本当に心から手放しで喜んでいる。

雪黒部を研究し始めて色々なことを知った。冠松次郎を筆頭する文人墨客型の登山家以前に、黒部の山々は柚人や獵師山師の跋歩する場所であったこと。谷々の名称の中に色々な歴史の刻まれていること。本当に楽しませてくれる峡谷である。

電力開発の最初の青写には黒五ダムを薬師沢出合に作ることであったという目茶苦茶な破壊計画であったこと。しかし、極めつけは、黒三ダム工事についての実体であった。

1939年3月大阪商大の黒部S字峡横断と全く時を同じくして、高熱隧道で多くの朝鮮人労働者が死んでいたことは驚きだった。38年12月27日の志合谷の雪崩事故で亡くなった朝鮮人夫婦。金命石さんは飯場頭、妻の朴景述さんは賄婦。末子で1才の金永旭さんと共に志合谷に消えた。長男の金鍾旭さんは戦後帰国、92年

両親の志合谷法要のため来日している。

朴さんの遺体は、事故後の春、雪溪の中から発見されたが、金さん父子は今もって不明である。黒部を流れ富山湾に漂っているか、溪谷の土砂に埋もれているか。あの厳しい冬黒部の意外な一面に驚いた。翌年39年1月の阿曾原の雪崩遭難など多くの人々が働き死んでいっている。

冠松をして驚嘆せしめて海内無双の冬の峡谷に、かたや戦雲暗き時代にヒマラヤを目指した先輩たちの青春譜、雪黒部横断、かたや高熱に焼かれ、植民地支配の被圧迫の一生を終えた異邦人の生活があった。ドラマである。横断に参加した先輩達のうち、片山良一さん、入江康行さんはビルマで、林弘さんは沖縄で、川本秀雄さんは華中で戦死されている。森本嘉一さんはシベリヤ抑留後、ランタンリルンで遭難死された。戦争の悲惨は雪黒部にも刻まれていた。

冬の小黒部谷などたいしたビューキじゃないよ。脳天気な極楽トンボの軽い自閉症なのだと、またぞろ落ち込みそうな今日この頃である。

戸隠・本院岳ダイレクト尾根

青島 靖

1992年12月30日～1993年1月1日

メンバー： 乃村昌宏（立命館大OB）、高塚泰司（近大OB）、青島

師走の長野市内を後にしたタクシーが飯縄山の南麓に達すると、眼前にめざす戸隠西岳連峰が屏風の広がりを見せる。「今年はだいぶ雪が少ないですよ」タクシーの運ちゃんの言葉通りの風景に、昨日まで今年は雪が多いことを疑わなかった3人は肩透かしを喰った気分になる。さては大手スキー場のマスコミを利用した陰謀にまんまとはまってしまったか。タクシーはあっさりと上楠川まで入る。

薄く雪をかぶった川沿いの歩道を1時間余りも歩けばもう尾根取付だ。下部のやせ尾根を登ると、本日宿泊予定の白樺台地に着いた。時計を見るとまだ10時前。高曇りの天気は徐々に下り坂の霧囲気だ。緩い尾根を上り詰めると鳥居ハングと呼ばれる第一の岩壁に出る。ダイレクト尾根の核心部はここから始まる。

左に巻き、岩壁の間に食い入る雪崩たばかりのような雪のルンゼを登って尾根に出、続くP2も左にずーっとトラバースして尾根に戻る。P3は尾根通しに登り、再び下りとなってコルに降りる。気温が高かったせいか春山のような雪質だが、いつしか風が強まり小雪が舞い始めた。P4も壁を左に巻いてトラバースし、

雪壁を登り返して尾根に出る。P5あたりは尾根の左をトラバース気味に進むと尾根は左にカーブし、尾根通しから右手を登ってP6に出る。

ここまでは別にどうということもない雪尾根だったが、次のP7は手強そうでアンザイレンする。下の切れ落ちた岩壁を左にトラバースし、急な雪壁をもがき登って尾根に出、後は尾根通しにP7へ（1ピッチ）。小広い平頂でテントも張れよう。ギャップへ下り、やせ尾根をたどってP8（ジャンダルム）基部へ。

まずリッジ通しに登り、右へトラバースして底無しの雪壁から尾根に出る。続いて尾根の左手を登ると傾斜の緩い尾根になりP8へ（2ピッチ）。先行パーティはここで幕営するとのことで、有り難く先へ行かせてもらう。P8からはキレットへの懸垂下降だが、ここはかなり左に振った所から下らないとキレットには達せないので要注意。視界の十分でない中、高塚さんの好リードで正規ルートを下るが、それでも50m一杯だった。

ものの本にはダイレクト尾根の核心部はジャンダルムまでと書いてあり、ここまで予想外に簡単だったので我々はもうほとんど終わった気になっていたが、実はこれから先に核心部が控えていたのだった。

キレットからの登り返しは、左に振って浅いチムニー状を登り、急な雪壁を突破して傾斜の緩んだ尾根に出るが、波いピッチだった。この先にあるというプラトーを探すか、それらしい所は無く、尾根上にテントを張る。

大晦日。雪が降っているが、そうひどい崩れではない。ほぼ水平に延びる雪稜をたどり、急な岩尾根に出る。もっと雪が付着すればカンカンと快適に登れるかもしれないが、今は見るからにいやらしそうで、急な雪壁を右に1ピッチトラバースしてから底無しの雪壁を尾根へと登り返す。続くきれいな雪稜から小岩壁を右に回り込むと再びフェース状の岩尾根が現れ、乃村さんが試みるが、プロテクションも取れないのでやめて、また右へのトラバースを行う。このあたり側壁に残置ハーケンが乱れ打ちされており、先人も苦勞している様子だ。1ピッチトラバースしてから急な底無しの雪壁を高塚さんが巧みなルートファインディングで右上し、さらにブッシュ帯を右上に抜けると傾斜の落ちた雪面となり、ひと登りで尾根に戻る。すぐ先のラクダのコブの様なピークは左のトラバースで通過すると本院岳への最後の急な登りが待っていた。正面は急なキノコ雪状なので右に回り込むが、ここも急峻なブッシュの上に雪がのった最悪の雪壁で、「はまってしまった」と後悔すれど戻れず、腕力をほとんど使い果たして雪稜に出る。雪稜も急なキノコ雪状で根気よく崩しながらブッシュに達した。その先1ピッチも底無しはいやらしい雪壁だったが、何とか登り終えるとそこは夕闇せまる本院岳の頂

だった。頂上にテントを張る。今日は1日中雪の中でのアンザイレン、12ピッチ、よく働いた。夕方から冷え込んできたので、明日は多分晴れるだろう。

明けて平成5年元旦。薄いガスの中に初日は昇り、やがてそのガスも晴れて快晴となる。白い雪稜を高妻山方面に向かう。途中、板倉清水の大ギャップは左に降りた適当な所から下降し、右へとトラバース気味に下り尾根に戻る。西岳連峰は東面は切れ落ちているが西面は穏やかな斜面が広がり、尾根上もまるで奥美濃辺りの山を歩いているような平和な気分だ。裾花川のブナ林の広がりが素晴らしい。八方眺からは、本院岳ダイレクト尾根の全容が見わたせ、苦勞させられた上部のラインもよくわかる。当初はこのまま一不動ないしは高妻山まで縦走しようと話していたが、高塚さんの「縦走は変化がなくて疲れるだけやで」「表山のルンゼのようすを見たい」というあまり説得力のない意見に従い、ここから下山することにした。八方眺の尾根も上部は細い雪稜で割と面白いが、もうトレースがバッチリだ。奥社に下り着き、御神酒を頂いて初詣を済ませ、初詣客で賑わう参道を中社へと下山した。名物・戸隠そばに舌鼓を打ったのは言うまでもない。



--- 東京支部員からの便り ---

ハイキング雑感

堺 皓二

ここ数年、南ア北岳・塩見、北ア表・裏銀座、槍穂縦走などを夫婦で、時には友人も加えて歩いている。北岳より熊の平に至る間の、ちょっと緊張する逆層ステップの三峯岳、熊の平小屋前のお花畑、居心地の良い木造のぬくもりのある小屋。夕食は揚げたての山菜天麩羅が出た。日本酒、ビール、ウィスキーちょっと多いのではと思っていた事がハプニングとなった。塩見小屋は狭い稜線にへばりつく様に質素に建っている。しかしここからの景色はどこをとっても絶景だ。北ア朝日小屋は、みちがえるばかりのモダンな木造2階建となっていた。

魚津山岳会の人々が世話をしてくれて、生ビールが下界並みの値段で飲めた。泡が多いと気を使ってくれて、それで注文がドンドン来て、売り子も買手も一緒になって、小屋の前に集まって、ビールを飲んでしゃべっていた。翌日は蓮華温泉に浸かって帰った。しかし平馬の平から蓮華までの登り返しがしんどい。

* * *

東京近郊の奥多摩のどんな山からも富士山が眺められる。冬は特に近く白く大きい。

雪化粧した奥多摩の山を眺めていると、新雪の山に行きたくなった。今年の1月の半ばに山梨県東部にある権現山 1,200mに行った。中央道萩野ICより仲間川を西行し、支流の和見川を北上すると和見部村に着く。

和見は権現の東南麓の南に開けた傾斜地の上であり、日当たりが良く、長寿の村でもある。村の小道の両側には除雪の雪があった。村端れに車を止め、山靴とスパッツにはきかえて、歩き出す。樹林帯の尾根道はクラストしていたが、稜線はパウダースノーだった。北方は谷あいの村を隔てて笹尾根、その後に雲取り山、西に飛龍、大菩薩嶺、甲武信岳を展望しつつ権現頂上に着いた。南正面には道志の山々を前山にして富士山が大きく立っている。右に三ツ峠、左に丹沢の山とぞいたくな眺めの中でお茶を沸かし食事をする。直下に神社風の小屋があり、昔村人が人目を忍んで博打をしたと伝えられている。登り2時間半をかけての博打もご苦労な事だ。帰りはクラストも溶けていて、1時間半で下った。温泉に入って帰ろうと、談合坂の近く古城温泉を探したが見つからなかった。

マッターホルン・スキー事情

佐藤一良

山辻さん、藤村さん両先輩連名の柵池スキー行の案内をいただいた。学生時代からバンコックに駐在するまで、しばしば足を運んだ柵池館での楽しい集いへの誘いである。なんとか時間をやりくりして、2日でも3日でも参加しようと考えたが、南無三イタリアからの客人が連続して来日することになっており、泣く泣く次の機会を待つことにした。

藤村さんに不参加の返事を出したとたん、電話が二本。廣谷氏より、2月20日四光峰の時北京でCMAの通訳として世話になった趙建軍氏と一席設けるので出席せよとの誘い。もう一本は、矢倉さんより以前約束したイタリアスキー事情について書くようにという脅迫。それも本人がカナダにスキーに行くので早く書けと言う。

塩野七生女史の数々の著作を片手に、2年間で200日余りイタリアで生活し、

500日が東京での単身生活、30日足らずが大阪で家族と一緒に、というパターンで、まさに風来坊のような生活。ただ山岳部時代のテント生活で鍛えていただいたお陰で、本人は一向苦にならず、米を炊き、ミソ汁を作っては女房殿の味より数段上と一人悦に入っている次第。

世のアマチュアの常として、（私だけではないと信じて疑いませんが）、スキーは釣りによく似た所があります。「釣った魚の大きさを聞く時は両手を縛ってから聞け」というのはロシアのことわざでした。スキーも滑る前後は、あの斜面はどういう風に滑り、あのコブはどのようにこなしたかと口スキーに興じ、かつ本人が思い込んでしまうのが楽しいという性癖が必ず出てくるところが面白いのです。そういえばゴルフもそうですね。

週末を利用し、駐在員の子供をダシにして、時々イタリアでスキーを楽しんでいます。ミラノから2時間30分のドライブでマッターホルン（イタリア語ではモンテ・チェルビノと呼ばれています）の麓のチェルビニアに着きます。

標高2,000mのこの村にはスキーの為の全てが揃っています。ここでソリと靴を借り、ゴンドラとリフトを乗り継ぐと、スイスとの分水嶺3,600m迄登れます。高度差1,600mの広大な斜面に、緩急様々なゲレンデが整備され、実力に応じて楽しむことができます。晴れるとマッターホルンの岩峰が槍の数倍のスケールで眼前に在り、カラフルなパイプ椅子を持ち出して、良く冷えた白ワインを片手に塩味の少々強いサラミソーセージのサンドウィッチをパクつくのが昼食ということになります。上手な人は（相当足腰を鍛える必要がありますが）、スイス側のサンモリッツへ滑り降り、昼食後イタリア側で遊び、夕食はミラノのレストランというメニューもあるようです。

イタリアも今年は暖冬で雪が少ないそうですが、日本の山々より1,000m程高度があるので、たっぷりスキーが楽しめるようです。イタリアの友人たちが声をかけてくれます。曰く、ドロミテで16kmのダウンヒルをやらないか。曰く、モンテ・ローザで6月にサマースキーをやり、麓の温水プールで泳がないか。曰く、だけど、Mr.サトウ、土日2日間なんてスケジュールじゃダメだ。少なくとも5日間は必要だよと。彼らの意見を聞いているとその内クビになるので、日帰りスキー行で我慢しておきます。ちなみに費用は、一切合切込みで10,000円程です。勿論駐在員にドライバーを勤めてもらうお礼代わりの夕食代は含まれておりません。

カナダの岩場を訪れて

—バガブー山群とスコウミッシュ

青島 靖

私だけ会社の許可がもらえず涙を呑んだ91年のナンガバルバットは、それまでの1年間、休日の半分を返上して準備を進めてきただけに、ただただ無念な出来事だった。卒業して馬齢を重ねるにつれ、ひしひしと感じられる気力・体力の衰えと戦いながらクライミングを続けているものの、JR西日本ではないが「今しか行けない旅がある」のも事実で、92年は是非夏休みを利用した海外でのクライミングを実現させたいと思った。福岡のN君という恰好のパートナーを得て、当初はインド・クル山群を考えていたが、仕事等であわただしい日々を過ごしているうちに、いつしか申請の時期を逸してしまった。そこでヨーロッパかヨセミテにでもと目先を変え、費用、ルートスケジュール、岩質の良さ、鮮度（日本での知名度の低さ）の点から、最終的にカナダのバガブー山群に決定した。

バガブーはロッキー山脈の西に孤立した、氷河上に巨大な花崗岩の尖峰群（スパイアーズ）の蟠踞する素晴らしい山群で、わが国でも過去、柏瀬祐之氏（「岩と雪」58号）や中嶋岳志氏（「山と仲間」156号）らによって紹介されている。

参考書は、Green, R. & Bensen, J. "BUGABOO ROCK" The Mountaineers, 1990

（ルート図集）と Garden, J. f. "THE BUGABOOS" Footprint Publishing, 1987

（写真集）があげられよう。

ところが春になってN君が都合で行けなくなってしまい、「今年もか」になりかけたが、京都でカレー屋を営むKさんが誘いにのってくれ、後は航空券の手配だけかと思いきや、盆の前後は全く取れる見込みなく、出発、帰国枠を大幅に拡大し、そのための仕事の段取りと、会社関係の根回し、果てはシアトルから陸路で入るまで妥協し、何とか航空券を手に入れたのは出発の1週間前。8月1日に大阪からLAX行きの飛行機で離陸した時は、心底ほっとした気分だった。

シアトルでKさんと合流、早速レンタカーを借り、一路バンクーバーへ、Kさんの知人を訪ねてバンクーバー島を回り、4日夜にバンクーバーに戻って、5日市内で買い出しをした後、1号線を東へ向かう。内陸部に入るにつれ気候が乾燥してきて、果てしない風景と共に大陸らしさを実感。それにしても沿道のそこかしこに屏風岩クラスの壁が散見され、日本での岩登りがアホらしくなってくる。

バガブー山麓には6日に着いたが、雨で1日つぶし、登山基地のケインハットには8日に入った。以後13日まで滞在し、クライミングをおこなった。

8/10 BUGABOO SPIRE "NE Ridge" IV 5.7 10P

8/10 BUGABOO SPIRE "NE Ridge" IV 5.7 10P

手始めはやさしそうな所からということで、古典的名ルートと言われるこのルートに取り付く。昨日までの氷雪が上部にたっぷり残っていて予想外にシリアスなクライミングとなり、5.10aのバリエーションを登るなどして粘ったものの時間切れで、6ピッチ目終了点から懸垂で退却した。わずか6ピッチとは言っても、日本ではまずロープを出すであろう壁を200m登った先での話であり、高度感は凄まじいばかりだった。条件が良い時ならさほど難しくないかもしれないが、バガブーを代表する好ルートの一つであることは間違いないだろう。

8/11 SNOWPATCH SPIRE "Kraus/McCarthy Route" IV 5.8+ 8P

当初、Wildflowers (5.9, 6P) というガイドブック推薦のルートに登るつもりだったが、初見の我々にはルートが特定できず、柏瀬氏推薦のこのルートに変更した。壁にはあいかわらず雪が残り、それらを叩き落としながら登ったが、それほどいいルートでもなく、おそらくバガブーでは下の中くらい、グレードもせいぜい5.6 どまりだ。頂上は背筋が寒くなるくらいに(4~500m)切れ落ちており、ポカポカ暖かくて、気持ちのいい所だった。下降は同ルート懸垂。

8/12 PIGEON SPIRE "West Ridge" II 5.4

ピジョンでは是非ともレイトン・コアの拓いた East Face (5.10-, 16P) を登りたかったが、アプローチの氷河がズタボロのため取り付くのに時間がかかり、日帰りは苦しいだろうと判断し、北面の Wingtip (5.10-, 6P) を登ることにした。しかしルート上部に雪がかなり残っているのが見え、取付に立つと凍り付いたクレバスが口を開けているうえに、見上げる5.10-のオフウィズスが荷物を担いではしんどそうで、他のルートを物色したがこれはというものがなく、とりあえず西稜からピークに行ってみることにした。ここはノーロープで行ける小1時間程のルートだが、日本ではまず体験できないような気持ちよい岩稜歩きができる。

8/13 CRESCENT SPIRE "McTech Arete" III 5.10a 7P

日程はあるのもっと滞在したかったが、翌日からまた天気は下り坂になるという事で、午前中短いルートに登って今日中に下山し、バンクーバー近郊にあるという "better than YOSEMITE" ことスコウミッシュへ行ってみることにした。今日はアプローチが手近で、小屋のクライマーからも好ルートと聞いていたこのルートにする。下部2ピッチはハンク越えのある手の切れそうなコーナークラックから左上するシンハンドのクラックへつなぎ、上部はアレート状のフェースを

クラックを利用して登っていくもので、面白くはないが、わざわざバガブーまで来て登るようなルートでもないような気がした。回りを見渡せば、ここならではの素晴らしいルートが一杯あるのだから。

15日にバンクーバーに戻り、16・17日にスコウミッシュを登った。来て見てびっくりすごい岩場で、大阪をバンクーバーに例えれば、生駒山の裏側にブッシュをこそげおとした奥鐘山を持ってきたという感じだ（帰国して調べると「クライミングジャーナル」26号に紹介記事が載っていた）。我々が登ったのは、APRONのSnake (5.9, 7P)の他、ショートルートでLITTLE SMOKE BLUFFSのLieback Blake (5.9)、Neat and Cool (5.10a)、SM's Delight (5.10b)である。

以上でカナダの報告を終わる。3週間近くもいながら、実質的にクライミングできたのは1/3くらいであった。その分、町で過ごす期間が多く、いろいろな体験ができたのでこれはこれで良かったと思っている（ちなみに慣れない左ハンドルの走行距離は3,500mに達した）。再訪の機会があれば、今回登り残したSOUTH HOWSER SPIREのBeckey-Chouinard Route (5.10a, 20P)やPIGEONのEast Face, SNOWPATCHのBugaboo Corner (5.10-, 10P)の他、素晴らしいSNOWPATCH北面にルートを拓いてみたい… だれか行く人いないかなあ？

「山岳会」という名を冠していながら、卒業してクライミングをやめてしまうOBが多いのは残念な限りだ。気楽な学生時代と違ってそれば努力を要することだが、カナダで40、50になっても登っているクライマーに一杯会ったし、彼らはエクストリームリィ・ハードなルートこそ登らないものの、余裕を持ち、心からクライミングを楽しんでいるように見えた。私もかく老いたいと思う。

★★★編集後記

・『IZUMI LOUNGE—泉隆次郎追悼集』いかがでしたでしょうか。暖かいお礼状も何通か寄せられております。ありがとうございました。今回痛感したのは図書管理の必要性です。今後の課題にしましょう。

・青島氏原稿2件、奮闘お疲れさまです。氏の言の通り山行を続ける会員が特定されるのは寂しい限りです。A LITTLE HARD でも長く…これですよね。